

プロジェクト - OFW・DFW -

大学院国際開発研究科長 中 條 直 樹

本年2月ニュースレター第3号をお届けし、今回第4号を発行、なんとか年2回の発行を維持している。今後も継続的に国際開発研究科の動向をお伝えしたいと考えている。

ニュースレター4号で最初にお伝えしなければならないことは、文部省、名古屋大学をはじめとする関係各位のご配慮により、研究科棟の増築工事が認められ、所期の計画通りに研究科棟は来年1月末に竣工の予定ということである。1994年12月の第一期工事終了時には、当初計画の3分の2、約4000平方メートルの建物としてその姿を現した。ただし、東側には増築の可能性を示す突出部分を残してであった。「本学では増築の予定というのは、増築が無いこと」と耳にしていたため、この第一期工事完成がそのまま完成かと喜びも半ばであった記憶があるが、ここに竣工まで数ヶ月を残すまでになった。研究科棟の完成により、教育・研究条件は遥かに改善されるはずであり、益々の成果が期待される。今後とも関係各位のご指導、ご鞭撻をお願いしたい。なお、竣工後早い時期に、華美に流れず、国際開発研究科に相応しいお披露目を考えている。

本研究科は、平成10年3月に国際コミュニケーション専攻から最初の学位（学術博士）取得者を世に出すことによって完成する。この間、先行の国際開発専攻、国際協力専攻は、後期課程終了者に学位（学術博士）を順調に授与しており、学位取得者の多くが、教育・研究機関にその活躍の場を見出していることは誠に喜ばしい限りであり、諸氏には、それぞれの研究の進捗を期待し、成果を挙げることを心より望みたい。

次に、本研究科の重要なプロジェクトである海外実地研修（OFW）について述べなければならない。OFWは、3カ国でそれぞれ2年間連続の研修を行う、つまり6年を一つのサイクルとする研修であり、本年8月に実施したインドネシアでの研修により、最初のサイクルが完結したことになる。因みに3カ国とはタイ、フィリピン、インドネシアであるが、OFW実施に際しご援助頂いた方々、またお世話になった3カ国の大学関係者にこの場を借りて厚く御礼を申し上げたい。本年のOFWは、「報告書」（平成10年3月刊行予定）の提出をもって終了するが、これを機会に6年間にわたり実施されたOFWに関して外部の有識者を

招いて総括的な評価を行おうと計画している。言うまでもなく今後もこのOFWは本研究科の基本的なプロジェクトとして位置づけ、更なる展開を計る積もりであるが、実施に当りご協力頂いた海外研修基金の目減りも急であり、その対策が緊急の課題であることをここに付言し、これまで以上のご協力をお願いしたい。

本研究科のもう一つのプロジェクトである国内実施研修（DFW）も順調に行われている。過去2年間は愛知県一色町のご協力を得て行ったが、本年は同県足助町に調査対象を変更し、9月末に行われた。足助町挙げてのご協力に対し御礼を申し上げる。OFWに比してDFWには世間の耳目を引くような派手さはないが、留学生を中心とした参加院生と現地の住民の方々との交流が大きな成果をもたらし、更に地域の国際化にも一役を買うといった付随的な効果も挙げているようである。これは随行し、指導される教官の努力は言うに及ばず、参加院生の熱意の賜物であり、DFWに対する評価も年々高くなっている。

平成9年6月、本研究科において指導的役割を担い、益々のご活躍が期待されていた嘉数啓教授が、職を辞し、沖縄振興開発金融公庫の要職につかれた。本研究科にとっては必要欠くべからざる研究者であり、指導を受けていた院生諸君も多く、極めて残念な転出であったが、断腸の思いで先生を沖縄へお送りした。一層のご活躍をスタッフ一同衷心よりお祈りしている。

本研究科はこれまでに延べ36カ国から留学生を受け入れてきたが、これは他の研究科には見られない特色の一つである。異文化の壁に跳ね返されそうになりながらも研究に従事し、留学の目的を達成しようとしている彼等の真摯な態度をご理解頂ければ幸いである。



増築工事中の研究科棟

国際開発研究科の留学生： 留学生アドバイザーの立場から

留学生担当講師

吉岡 美千子

1. GSIDの留学生

1991年に国際開発研究科が発足してから、本研究科は積極的に留学生を受け入れてきました。全国的には外国人留学生数が停滞気味であるにもかかわらず、本研究科においては留学生数が年々増加しており、その数は発足時の8名から114名に増加し（表1参照）、この7年間、常に外国人留学生は、本研究科総学生数の約3分の1を占めてきました。

外国人留学生の出身国は実に多様で、本研究科は、これまでに36ヵ国からの留学生を受け入れてきました。そして、現在では33ヵ国からの留学生が本研究科で勉学に励んでいます（表2参照）。

本研究科の留学生のほとんどは、修士又は博士学位取得を目的として来日しますが、2年ほど前から、学術交流協定を結んでいるタイ・チュラロンコン大学、フィリピン大学ロスバニヨス校、オーストラリア・マッコーリー大学等から、学位取得を目的としない1年間の短期留学生を若干名受け入れています。これらの学生には、教官の指導を受けながら調査研究を行う者、本研究科で受講し、帰国後母国の大学で単位認定を受ける者などがいます。

学位取得を目的としている留学生のうち約3分の1は、各課程を修了するまで十分な奨学金の受給が保証されている国費（外国人）留学生、愛知留学生、外国政府派遣留学生等です。残る3分の2の学生は、留学中に運よく民間財団の奨学金を受給する者もいるものの、奨学金の種類、受



留学生等と国内実地研修に参加した筆者（右から2人目）

給額、受給期間には限りがあるため、ほとんどが財政的に相当苦しい留学生生活を送っています。

2. 留学生を取り巻く環境

【教育】

本研究科では、留学生数が多いことに加え、そもそもの設立の目的が将来途上国援助において国際舞台で活躍する人材を育成することであったことから、一部の講義は英語で行われており、これが本研究科に非漢字圏からの外国人留学生が多い理由の一つとなっています。しかし、単に英語で行う講義があることだけが本研究科の教育の特色ではありません。教官の経歴を見ると海外留学経験のある教官が多いばかりではなく、途上国援助に関わる国内・国際機関での勤務経験のある教官もおり、豊かな人材が揃っている

表1：GSIDに在籍する留学生数

	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997
留学生数	8	19	38	59	83	110	114

（各年度5月1日現在）

表2：GSIDに在籍する留学生の出身国別内訳

国名	人数	国名	人数	国名	人数	国名	人数	国名	人数
中国	37	ベトナム	3	タイ	2	オーストラリア	1	シンガポール	1
台湾	14	ロシア	2	ハンガリー	1	ケニア	1	セイシェル	1
インドネシア	7	カンボジア	2	スーダン	1	コンゴ	1	アイルランド	1
韓国	6	インド	2	ウクライナ	1	メキシコ	1	バングラデシュ	1
アメリカ	5	カナダ	2	セネガル	1	アフガニスタン	1	ネパール	1
ブラジル	5	フィリピン	2	ベネズエラ	1	ドイツ	1		
スリランカ	5	イギリス	2	ルーマニア	1	ナイジェリア	1		

（1997年5月1日現在）

ることが、将来母国の開発援助に携わることがを希望する外国人留学生のニーズに合う教育・研究指導を可能にしています。また、毎年行われる海外実地研修（OFW）では、参加者は経済・社会開発等に関する調査を1ヶ月間現地で行うことで調査・分析方法を学ぶ機会を得ることができます。一方、日本の地域開発の現状を学ぶことができる国内実地研修（DFW）についても留学生から高い評価を得ています。

【論文作成指導】

本研究科では学位論文は英語又は日本語で執筆することになっていますが、留学生の中にはせっかく日本に来たのだから日本語で修士・博士論文を書き上げたいと希望する者が少なくありません。一方、日本語力が十分でないため英語で論文を執筆しようとする留学生の多くにとって、英語は母国語ではありません。このように母国語でない日本語又は英語で論文を執筆しようとする学生を支援するために、昨年度から論文執筆補助担当助手2名（日本語担当1名、英語担当1名）を配置し、論文作成指導を行っています。

【事務手続き】

事務室の中でも特に教務掛は外国人留学生にとって「大学の顔」、「日本の顔」です。本研究科の教務担当者は留学生とのコミュニケーションに最大限の努力をしていますが、日本語能力が十分でない留学生にとって事務手続きはやはり容易ではありません。しかし、本研究科に在籍する留学生数は増加する一方であることから、昨年から国際経験が豊かで英語が堪能な非常勤職員が配置されました。その結果、事務室と留学生の間のコミュニケーションも円滑になり、「教務掛での事務手続きがしやすくなった」、「掲示物が2ヶ国語（日本語・英語）で表示され、わかりやすくなった」との声が留学生から聞かれるようになりました。

【留学生相談室】

留学生相談室とは、外国人留学生が日本語・日本文化・学生生活等において何らかの問題に直面した時に、とりあえず訪ねれば問題解決の糸口が見つかるかもしれないという場所です。1993年7月に設置されて以来、本研究科の留学生相談室には1名のアドバイザーが配置されており、それが筆者です。木曜日を除く平日午前10時から午後4時までが相談室の利用時間となっており、1日平均5人、多い日には10人から15人の来室者があります。履修方法、在留手続き、宿舎・奨学金情報などに関する質問が多く、簡単な質問であれば一人当たりで費やす時間は10分から15分程度とあまりかかりませんが、事務書類記入の手伝い、苦情処理となれば30分から1時間ほどかかることも多々あり、

さらに悩み相談ともなると数日間にわたり時間をかけて相談にのることになります。

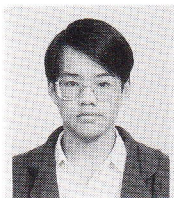
他方、来室者の中には、学外からの入学希望者の受験手続に関する問い合わせが多くあります。また、来室による質問相談の他に、海外からの入学希望者の電話、手紙、e-mailによる問い合わせも多く、その対応に文字どおり明け暮れています。しかし、留学生アドバイザーは、じっと座って相談室に来る留学生、電話、手紙等を待っていればよいと言うわけではなく、入国管理局での諸手続き、宿舎の契約、病院への付き添い等学外へ出かけることもしばしばあります。

3. 留学生アドバイザーのひとり言

「留学生アドバイザーとは何か」と聞かれると、「留学生が日本で学生生活を送る上で必要な助言を与える教育者」と、かっこよく答えたいところですが、実際には前述のように助言だけではすまない場合が多く、仕事の範囲に制限はありません。それにもかかわらず、1名のアドバイザーで留学生114名+学外からの入学希望者+外国人客員研究員に対応しようとするのは神業で、もちろん私にはできません。したがって、私が行っている仕事は留学生アドバイザーが行うべき仕事のほんの一部でしょうし、日本人学生や先輩留学生の協力があって相談室は成り立っています。不十分な対応を不満に感じている留学生の皆さんにはこの場をお借りして心から謝りたいと思います。

悩み相談や苦情については、異文化差異もあり、アドバイザーである私自身も誰かのアドバイスをもらいたくなることがしばしばありますが、プライバシー保護の問題から相談内容は、簡単には他言することができず、留学生アドバイザーとは実にストレスの溜まる仕事だと感じるとともに、ボランティア精神もかなり必要な仕事だと思います。しかし、留学生アドバイザーという仕事を通して、帰国旅費が払えない女子留学生を見るに見かねて、無け無しのお金を彼女に渡した東南アジアからの留学生Aさん、同じく学費が払えない留学生を助けようとチャリティを行った東南アジアからの留学生Bさん、「海外にいた時現地の人に助けてもらってうれしかったから」と留学生相談室の仕事を手伝ってくれた日本人学生のCさんや「死ぬ前に人に喜んでもらえることができたならええだわ」と留学生に援助の手を差し伸べることを借しまない87歳のDおじいさん、「自分も指導教官にそのようにしてもらったから」と留学生の教育のみでなく生活面にも心を配るE教官等々、すばらしい人々がたくさんいることも知ることができたのは、役得だと言えます。

初めての名古屋



DID M1 張 巍 騰 (台湾)

日本に来てから早いもので、もう1年と6ヶ月が過ぎようとしています。楽しい時、時間は「光陰矢の如し、歲月梭の如し」。そういえば、ここにいる1年6ヶ月間は本当に楽しい日々を送っていると思います。

去年の4月、初めて名古屋についた時、期待と不安が私の心の中で交錯していました。幸いにも先輩の助けで、一緒にいろんな手続きをすませ、なんとかGSIDの研究生になることができました。そして、指導教官の江崎先生に会い（実は、私は目上の方に会ったら、すぐ緊張し、なかなかことばが出てこないタイプなのです）、先生はとてもやさしく、いろいろ貴重な意見を下さり、私の心の中の不安もほぼなくなりました。また、江崎先生の紹介で、博士後期課程の染矢さんと知り合い、彼はチューターとして、私の10月の入学試験の為にいろいろ教えてくれました。

去年10月の試験が終わった後、ようやく旅行する機会ができ、東京、京都、大阪、神戸など、いろいろなところへ行きました。中国の諺で「行万里路読万卷書」ということがあります。勉強だけでなく、旅行も私にとってよい経験になりました。

そして、今年の4月、期待に胸ふくらませ、GSIDの院生になることができました。授業やゼミで大変忙しいのですが、さまざまな本を読んで、いろいろな知識を身に付けることができるので、とても充実した日々を送っています。

昔台湾にいた時、他の友達からいろいろ聞いていたので、心の中では「日本人の方々と友達になることはそんなに簡単なことではない」とずっと思っていました。しかし、GSIDに入ってはじめてそんなことは全然ないと分かりました。去年は、今のM2の方々と良い友達になり、今年もM1の方々と良い友達がいっぱいできました。私は、本当に幸せだと思います。特に、日本の方々だけではなく、世界各地からの方々と出会って、友達になれたことは、本当に自慢できることです。

今は、修士論文のことについて頭を悩ませています。残り一年半で、先生と先輩達の指導の下、全力を傾け、良い論文を書く準備をしようと思います。皆さんも私と一緒にここ一年半を大切に、頑張りましょう！

日本での留學生活



DICOS M1 朱 鳳 嵐 (中国)

人はよく「矢の如く」という言葉で、時の流れの速さを喩える。この言葉はまさに私が実感するところである。指おり数えると、日本での留學生活も二年目を迎えている。過ぎ去ったこの一年六ヶ月を改めて振り返ってみると、本当に感無量である。

約十年前（大学時代）から憧れていた名古屋大学（注：出身大学と姉妹提携大学なので、よく知っていた。）への留學は、根強い努力の結果、社会人になって七年目の去年4月にスタートした。留學に対し、色々な夢を抱いた私にとって、その興奮は言葉ではなかなか形容できないほどだった。

しかし、来日の翌日から、家族を離れ、右も左も分からない異国の環境の中で、私は孤独感に陥ってしまった。母国の大学で専攻した日本語も、日本人ばかり、日本語だらけの日本では、何て不十分なのだろうと強く実感した。何と言っても、この言葉の壁は、研究上、かなりの不便をもたらした。特に、専門の本を読むには、母国語で読むのに比べ何倍もの時間を使わないと、深く理解できるとは言えない。私は、まさに現実の厳しさに直面した。

しかし、人間はいろいろな体験をしてこそ、人生をより充実させることができ、より強い意志をもつことによって、最後の目標を達成することができると思っている。それゆえ、ホームシックなど様々な困難を乗り越えて、一年間の計画を立てた。

まず、積極的に異国の環境に入り込んで、『郷に入れば郷に従え』を実践し、留學生向けの活動にも参加すること。

次に、『初心忘れるべからず』で留學の目的をよく頭にインプットしておけば、困難に遭遇し一瞬失いかけた、やる気もすぐ出ると思う。

そして、異文化と衝突した時には、相手の立場に立って考えれば、理解もしやすくなることを忘れないことである。

国際開発研究科では、皆兄弟のように共に毎日頑張っている様子を目にしながら、楽しい留學生活を送っている。

皆さんも、日本滞在中、良い面は取りいれ、良くない経験は忘れるようにしてください。

最後に、この機会を利用させていただいて、研究上は厳しくとも、ふだんはとても優しい指導教官の木村先生、留學生の面倒をいつも笑顔で見守って下さる留學生相談室の吉岡先生、親切な態度で見守って下さる事務の方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

MY “RYUGAKU” AND “THE MAGIC LAND”

~GSID AND I~



DID M2 TAN BEE BEE SWISSDY

(シンガポール)

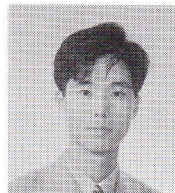
Anyone who steps into the GSID building for the first time will probably be surprised by the sudden switching on of the lights along the corridors. And anyone who has read “Alice in the Wonderland” will probably feel that the building is like a magic land. Yes, that is what I like about GSID. Those lights that brighten each of my steps delight me and they give me a sense of pride and pleasure guiding visitors around as I look into their wondering faces and hear them say “sugooooii” with extra emphasis. It is indeed a very high-tech building, constructed in a way that energy be wasted as little as possible and yet at the same time, providing the most comfort to its visitors, students and staff working in it.

On top of that, it has the most up-to-date computer network that keeps me in touch with the world and of course my home, Singapore. Well, I would say GSID has every facility that a student may need, from the photocopy cards to the latest soft-ware, you name it, GSID has it. But, if the graduate school only has all these things, then it is just same as any other graduate schools elsewhere. It would be too cold and robotic if the school has only machines and computers. What makes it different is the friendly ambience that one experiences as he or she starts the academic year as a student. What so great about those machines if the academic advisors scorn at your ideas and make you feel like a stupid fool. It is really nice to have professors here who use polite linguistic forms when speaking to the students in Japanese. Some will even try to speak in English if the foreign student cannot converse proficiently in Japanese. If you happen to enroll in a driving school in Japan, you will realize how humble indeed the professors in GSID are. Then, there is also the foreign student advisor who often goes beyond her duties to help solve the problem when the foreign student is in trouble. No one provides as good a listening ear and an understanding heart as her.

Well, as most students who enter graduate schools will probably engage themselves in some academic

teaching in the future, and no exception for myself either, GSID is, to me, a good place for nurturing the educating character and gaining the competence necessary as an academic instructor. It is also a perfect place for international cultural exchange for it has students from all parts of the world. Just as its name says, “Graduate School of International Development”, it is truly international.

私にとって“国際開発研究科”とは



DICOM M2 朴大王 (韓国)

日本に来てもう2年6カ月が経とうとしている。今でも完全に(?)日本の生活に慣れたとは言えないけれども、来たばかりのときに比べたらいろんな面で不自由なことが少なくなってきた。最近、いちばん苦手だった畳の生活にも平気で過ごせるようになったし、道端で人に道を尋ねられても戸惑うことなく返事できるようになった。日本の生活に自然に溶け込んでいくもう一人の自分と出会うことが楽しみの一つである。それが留学で得られる貴重なものだとすれば、その舞台になる名古屋大学大学院国際開発研究科というのは、単なる母校ではあるまい。

国際開発研究科という研究科名自体がなじまないまま始まった去年の春は、なんだかんだ忙しかった。他の専攻はよく分からないけれども、私の所属している国際コミュニケーション専攻は、さまざまな国の言語やその国と関わることについて研究したい学生には、ちょうどよいのではないかと思う。授業の面では5つの分野に細分されているのと、他研究科との交流も幅広く取り入れてあるから、学生にとっては、選べる範囲が広がる点などのメリットがある。特に、7階の情報処理室はいつでもコンピュータが自由に使えるし、初心者及びいざというときはいつも優しく教えて下さる松村先生がいらしてとても助かっている。日韓対照研究の面でも指導教官との出会いは何よりのことである。

実はこの原稿の依頼を受けて何をどう書けばよいのか躊躇したが、日ごろ思っていることを素直に書けばと思った。いつのまにか、私もすっかり国際開発研究科の者になってこのような文が書けるようになったんだってあらためて感じた。

現在、工事の真っ最中の研究科棟は新しい夢を抱いて私たちの前にその姿を現すであろう。新しい建物にふさわしい国際開発研究科の発展を信じながら、私もがんばろう!

By the way,
Where is Venezuela?



DID M2 MARIANELLA DIAZ
GUERRERO (ベネエゼーラ)

ベネエゼーラはどこにありますか, is a question that perhaps some of you have been asked in GSID, by nobody else but me. It's not for any particular subject of study, or homework, but is simply a curiosity I have to see what is known about my home country within this International Development-related school. I have gotten diverse answers. Although I cannot quantify them since it has not been a formal study, I have heard it is located somewhere in Africa (surprisingly enough some people still seem to believe Africa is one big country, likewise with Latin America). I have also heard that Venezuela is believed to be somewhere in Europe, in North America, in Central America, and even in Asia!!!

Fortunately I also got the right answer. Venezuela is located in South America, which is not a country, but a region integrated by 13 countries, each of them trying to look for a proper path to pursue sustainable development, at their own pace. You can also say that Venezuela is in Latin America, a region integrated by Central and South American countries, united by cultural links of which language is the strongest. Spanish, which comes from Latin, is spoken by more than 300 million people in the world.

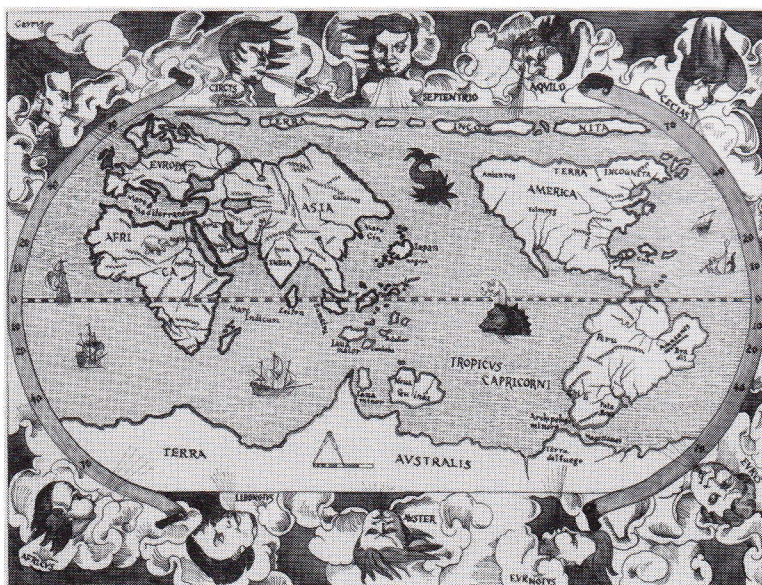
Venezuela is in a privileged geographical position. Located in the extreme north-east of South America, it is at the entry point of the Large Caribbean Basin. Venezuela's northern boundary is the Caribbean Sea (where the coastal region extends for more than 3,500 kilometers including islands); it borders Brazil to the south, the Atlantic Ocean and Guyana to the east and to the west it shares its frontier with Colombia. Its total territorial area is 912,050 square kilometers, composed of a great range of diversified landscapes with extremely rich and varied natural resources. Venezuela is almost 3 times the size of Japan, but it has one-sixth its population.

The most registered highlights of Venezuela are: the highest waterfall of the world: Angel

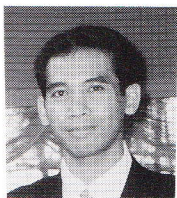
Falls; the most ancient rocks on Earth: Guayana's Massif; the largest lake in South America: Lake Maracaibo; one of the ten longest rivers on the planet: the Orinoco; and more birds species than almost any other country of the world. Founder of OPEC (Organization of Petroleum Exporting Countries), Venezuela has reserves of light crude oil that rank it sixth in the world and first regarding reserves of heavy crude oil. It was also a Venezuelan who invented the vaccine against leprosy and it is the country with one of the most sustained democracies in Latin America (39 years). Another highlight, less academic but perhaps one of the most publicized by the international media is the number of Venezuelans crowned Miss Universe, ironically a trivial matter that has introduced Venezuela to people all over the world.

Venezuela, more than static facts, is the sum of the efforts of its people, in whose hands, lies the present and future course of the nation. Young generations are working hard to assume the challenge of a better future not only for Venezuelans, but also for the rest of the world, since we are all together in the international arena.

Perhaps the next time you are asked about Venezuela, hopefully not only by me, you will know something more.



Agendas ahead for Indonesia's Development



DID D1 ANDIN HADIYANTO
(インドネシア)

It is good news for me that some students, researchers, and even professors in GSID have devoted their research on my country, Indonesia. "Their understanding" on my country is valuable. I appreciate it so that we can share and discuss particularly the remaining agendas ahead.

There is a lot of literature discussing Indonesia's development. Many of them have praised the success story. Indonesia is one of the fastest growing economies in the world. Indonesia has been remarkably successful in achieving its development objective over the past 30 years, income percapita has risen from US \$ 50 in 1967 to US \$ 1025 today, poverty has been reduced from 60 per cent of the population to an estimated 13 per cent, and etc.

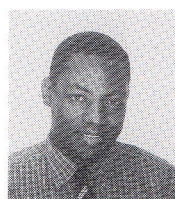
However, please, do not assume that those praises are too much with me. In fact, we still have many major problems to tackle. Let me give you some examples. Just take a look at the statistical data, today over 25 million people are still living in absolute poverty. This is more than the population of some our neighboring countries. If we look at the labor force, about 70 per cent or less have primary level education, and only about 3 per cent are university graduates.

The other main agenda for consideration is the national development which is concentrated in Java island. While the area of Java is only 7 per cent of the total area, over 60 per cent of population in Java. To some extent, the small area called Java is an attractive island. The soils of Java are by no means the most fertile in Indonesia. It is also clear that most of the financial wealth is concentrated in Java, particularly in big cities (70 % of the money supply is in the nation's capital, Jakarta). Java is the most attractive place for private investment and receiving the largest government investment as well. Then, just mention any best thing we want, we may probably find it in Java. Good infrastructure?, promising jobs?, or even good universities?

All the figures should tell us something about the

necessity of balanced development. What then is the best solution to alleviate poverty and to distribute development? It is always a bit harder to find solutions rather than to highlight problems. You may suggest that just spread the money and opportunity throughout the nation, then it will be getting better. I myself, a staff at the Ministry of Finance of the Republic of Indonesia, always investigate a wise use of national budget to enhance the effectiveness of its uses. "Wise" means that the use of the budget is based on the fact that there are still a lot of "less developed" people and regions which have not gained much of our fast economic progress. However, the wise use of the budget alone is not enough. A comprehensive and integrated regulation is needed. Participation and awareness of people in the concerned region are fundamental to the success of any development projects promoted. Apart from accelerating economic growth rates, eradicating absolute poverty, reducing inequalities and inter-regional disparities, creating more productive employment opportunities, and educating citizens on awareness to preserve environment are always awakening us.

NBED TO FORGE NEW LINKS



DID D1 NATHANIEL AGOLA
(ケニア)

The School of International Development is a relatively young institution when compared to certain famous Development Studies Schools such as the Institute of Social Studies (Hague, the Netherlands) which was established in 1952. Institutional age notwithstanding, GSID has very resourceful teaching staff capable of delivering the goods. Yet, there is still a problem of the lack of specialists for certain regions of the third world. The case in point here is Latin America and African continent. I must point out that the lack of specialists for these regions is not just the problem of GSID alone, but is reflective of the general situation in Japan. The danger is that so long as there are students interested in the study of these areas, be they foreign or Japanese students then they will constantly face many difficulties

in getting adequate and accurate information leave alone some form of expert guidance. Certain GSID projects such as OFW can be regarded as a milestone in the slow journey towards the creation of useful networks with institutions of the developing countries of Asia. However, such projects are tailored for the purpose of achieving different goals which renders them inadequate for the establishment of several instrumental networks with the many developing countries' institutions.

I would be very delighted to see extended deliberate efforts to establish various forms of working relationships with several Development Studies Institutions in the developing world since this would serve as the gateway to a vast body of accurate information. Access to accurate and upto-date information would in a way make up for the lack of specialists in the areas that I have mentioned above. The efforts towards creating instrumental networks would also facilitate the ease with which research can be conducted by the students of GSID in these countries. Currently, most of the attempts to get foreign contacts by students to enable them to carry out case studies in most of the developing countries other than their own can be simply described as a slow and painful process. It may be easier to dismiss this issue and relegate it to the level of those small matters that concerns only the individual, but personal contacts and individuals are bound to wither away as soon as the individuals leave GSID contrary to the permanency of an institutionalized system. Considering that doing new things always cost money, time and commitment, the first question that comes into mind is that of what it would take to initiate, mold and nurture these networks. It is my humble opinion that it would only take organizational initiative and commitment and not much of financial resources. I hope that as years pass by and more students continue to go through GSID, the institution would widen its networks with several development studies centers in most of the developing world since this would enhance the quality of research.

Behind the Scenes in Asuke Town : Domestic Fieldwork 1997

DICOS D1 MELISANDA BERKOWITZ

(アメリカ)



Asuke had been visualized as a remote and impoverished mountain town. That was the image I had gained through acquaintances from that area. It was quite a surprise, then, to find it representing a wealthy community during my sojourn in Asuke-cho with GSID's Domestic Fieldwork Project (DFW) this September.

Asuke is a lovely place at all times of the year. And in late September it is really in a land of scenic splendour. The deep blue hue of the sky overhead sets off the golden crops ready for harvest in the terraced paddy fields, and pink and white cosmos circle the big wooden houses. Bright orange globes hang heavy in the persimmon trees, and behind the houses forested mountains form steep dark valley walls. And through all these our tour bus swayed along the narrow highway towards the town hall.

Picturesque as it may be, Asuke is steadily losing its population. Of those who remain, almost one quarter are over 65. Asuke seems to be in a long term decline. According to our guide, the arrival of the railroad took away the town's position as a toll point on the salt route from the Pacific to the temples of Shinshu. More recently, forestry and agriculture have lost commercial viability, and no industry in the town has appeared to provide local employment. Even tourism is limited to a short stretch of the Tomoe River.

Nevertheless, looking around, the town seems affluent. Newly rebuilt farm houses are more commoner than mushrooms. And the school buildings! The number of children in the town is decreasing year by year. But the new elementary school which proudly invited us in for a tour was the most luxurious school I have ever seen. Even a small multigrade school, we passed by, was being renovated.

Meanwhile, the town is putting a lot of effort into innovative programs for the welfare of the aging population. The main policy is to support senior citizens' active participation in the community, primarily by providing work opportunities tailored to their needs and abilities. The most obvious scheme is the Hyakunensou

(Hundred Year Flower) community welfare center, a complex of sheltered workshops, restaurants, and hotel and recreation facilities. Further, the town also offers significant care services for infirm and bedridden senior citizens. For example, Hykunensou has a mechanical bath for bedridden users, some of whom say it has become their main pleasure in life.

So where does all the money come from? First of all, Asuke is within commuting distance of the neighboring industrial cities, Toyota and Okazaki. A number of Toyota subsidiaries also have factories within Asuke itself. Oldest sons and their wives are able to live in the

rural family home while earning an urban wage. Secondly, Asuke Town officials seem to have a real flair for tapping subsidies from the national and prefectural governments. At the next DFW in Asuke, I hope the town hall can give us a practical course, in writing grant proposals.

While acknowledging the success of DFW being due to the combination of the wholehearted involvement of faculty and administration, I have to honour to mention that thanks are also due to the warm welcome rendered by the people of Asuke and the hard work of Dr. Tanimura. Thank you!

客員研究員の紹介

[外国人研究員]

カミングス, ウィリアム K.: アメリカ合衆国

ニューヨーク大学バッファロー校: 教授

研究課題: 教育分野での国際援助の新動向

期 間: 平成9年4月1日～平成9年9月30日

マンズル ファリド ウィジャヤ: インドネシア

ガジャマダ大学経済学部助教授

研究課題: 電気料金と投資政策: ジャワバリ間相互供給システムをめぐって

期 間: 平成9年4月17日～平成9年7月31日

スー ウォン ウー: 大韓民国

ソウル大学校法科大学名誉教授

研究課題: 東アジア法文化の比較研究

期 間: 平成9年8月1日～平成10年3月31日

グエン, ビン ヌー: ヴィエトナム

国立経済大学国際協力学部副学部長

研究課題: 移行経済ヴィエトナムの産業政策

期 間: 平成9年10月14日～平成10年3月31日

バーカー, ニコラス ホームズ: イギリス

イースト・ウエスト・センター客員研究員

研究課題: アジアにおける宗教的自己犠牲の人類学

期 間: 平成9年10月1日～平成10年3月31日

[国内研究員]

阿部 義章: 世界銀行東京事務所: 雇用担当上級顧問

研究課題: 開発経済学に関する研究

期 間: 平成9年4月1日～平成10年3月31日

米山 正博: JICA国際協力総合研究所:

国際協力専門員

研究課題: 発展途上国の農業機械化に関する研究

期 間: 平成9年4月1日～平成9年6月30日

岡田 尚美: 国際開発高等教育機構: 事業部次長

研究課題: 開発援助における効果的プロジェクト・サイクル・マネジメント手法について

期 間: 平成9年7月1日～平成9年9月30日

小田野純丸: 大阪国際大学: 教授

研究課題: アジア太平洋地域におけるフィナンシャルインテグレーション

期 間: 平成9年10月1日～平成10年3月31日

久保田賢一: 関西大学総合情報学部: 教授

研究課題: 国際コミュニケーションに関する基礎的研究～国際協力におけるメディア活用とその運営

期 間: 平成9年4月1日～平成9年9月30日

毛利 良一: 日本福祉大学経済学部: 教授

研究課題: 世界経済における途上国債務問題の位相

期 間: 平成9年4月1日～平成9年9月30日

林 薫: OECF開発援助研究所: 主任研究員

研究課題: 日本のODA政策: 円借款を中心に

期 間: 平成9年10月1日～平成9年12月31日

谷山 博史: 日本国際ボランティアセンター: 事務局長

研究課題: 日本のODA政策～NGOの視点から～

期 間: 平成9年10月1日～平成10年3月31日

手島 茂樹: 日本輸出入銀行: 海外投資研究所次長

研究課題: ASEAN・APECの地域統合と日本の投資

期 間: 平成9年10月1日～平成9年12月31日

中野 武: 国際協力事業団: 調達部管理課長

研究課題: 日本の国際協力～国際協力事業団を中心に～

期 間: 平成10年1月1日～平成10年3月31日

田尻 陽一: 関西外国語大学: 外国語学部教授

研究課題: 東海地区における祭礼行事・民俗芸能に関する調査研究

期 間: 平成9年4月1日～平成10年3月31日

出版物案内

最新 国際開発研究科発行の印刷物

開発・文化叢書20

百姓の民際交流

—タイ農民との交流から学んだこと—

開発・文化叢書21

比較語彙研究の試み

A New Attempt of Comparative Study of Vocabulary

開発・文化叢書22

南アジアの市場化・法・社会

—南アジアワークショップ・報告論文集—

開発・文化叢書23

奈良県吉野町民間説話報告書

開発・文化叢書24

中国少数民族婚姻習俗

国際開発研究フォーラム 7

INTERNATIONAL DEVELOPMENT

海外実地研修シンポジウム報告書

An Integrated Development Analysis on Yogyakarta
Special District (DIY) in Indonesia

平成8年度 国内実地研修報告書

—愛知県幡豆郡一色町における開発事例の多角的検討—

平成8年度教育研究特別経費報告書

アジア諸国における人的資源の開発ニーズと開発戦略に
関する基礎的研究

平成9年諸外国からの来訪者

H 9. 4. 14 チュラロンコン大学総長外2名(タイ王国)

学術交流に関する意見交換のため

H 9. 9. 24 カンボディア教育・青年・体育省プログラム

運営管理局長(カンボディア王国)

教育行政等改善に係る視察及び意見交換

H 9. 10. 7 イースト・アングリア大学教授(イギリス)

学術交流に関する意見交換のため

H 9. 11. 7 インドネシア政府国家開発計画庁海外研修局

長外3名(インドネシア共和国)

学術交流推進のため

学術交流協定

本研究科とジョアキン・ナブコ社会科学研究所との学術交流協定を平成9年5月20日に、East-West Center教育・訓練プログラムとの学術交流協定を平成9年7月25日に下記のとおり締結しましたので、お知らせします。

ジョアキン・ナブコ社会科学研究所は、ブラジル北東部のレジュッフェ市に所在する、国際的に著名な人文社会科学系の研究機関であり、奴隷解放運動の指揮者ジョアキン・ナブコの名が冠せられています。

名古屋大学大学院国際開発研究科と ジョアキン・ナブコ研究所との 学術交流に関する協定書

名古屋大学大学院国際開発研究科長とジョアキン・ナブコ研究所長は、双方の研究上の協力及び交流を進展させるために、ここに学術交流に関する協定書を作成する。

1. 名古屋大学大学院国際開発研究科とジョアキン・ナブコ研究所は、双方の自主性を尊重するとともに、平等互惠の原則に基づいて、次の活動を行うものとする。
 - (1) 教官及び研究者の交流
 - (2) 学術資料、刊行物及び学術情報の交換
 - (3) 共同研究活動
2. 前項の活動を行うにあたっては、双方の協議を経て、実施計画を定めることができる。
3. この協定書は、5年間有効なものとし、その後は、どちらか一方が、6か月前に協定書の廃止を通知しない限り、存続するものとする。
4. この協定書は、日本語及びポルトガル語で作成し、両文書は等しく正文とする。



チュラロンコン大学総長(左から2人目)

East-West Center は、アジア・太平洋地域とアメリカ合衆国が、国家間の相互理解を深め、国際協力を促進することを目的に、1960年米国連邦議会によって設立された非営利の公的機関であり、同センターの教育・訓練プログラムは、アジア太平洋地域の理解と協力のための教育と研究に携わる部門 (division) であります。

名古屋大学大学院国際開発研究科と
イースト・ウエスト・センター
教育・訓練プログラムとの
学術交流に関する協定書

名古屋大学大学院国際開発研究科長とイースト・ウエスト・センター教育・訓練プログラム長は、名古屋大学大学院国際開発研究科とイースト・ウエスト・センター教育・訓練プログラムとの教育・研究上の協力及び交流を進展させるために、ここに学術交流に関する協定書を作成する。

1. 名古屋大学大学院国際開発研究科とイースト・ウエスト・センター教育・訓練プログラムは、双方の自主性を尊重するとともに、平等互惠の原則に基づいて、次の活動を行うものとする。
 - (1) 教官及び研究者の交流
 - (2) 学術資料、刊行物及び学術情報の交換
 - (3) 共同研究活動
2. 上記の活動は、双方の長により合意した覚書に基づいて実施されることとする。
3. この協定書は、5年間有効なものとし、その後は、どちらか一方が、6ヵ月前に協定書の廃止を通知しない限り、存続するものとする。
4. この協定書は、日本語及び英語で作成し、両文書は等しく正文とする。

単位相互認定

本研究科では、神戸大学大学院国際協力研究科及び広島大学大学院国際協力研究科との間に、単位を相互認定する協定を下記のとおり締結しましたので、お知らせします。

なお、詳細については、両大学から授業科目等の情報が提供され次第、掲示等により周知しますので、希望者は、事務室（教務担当）へ申し出てください。

名古屋大学大学院国際開発研究科と
神戸大学大学院国際協力研究科
との間における単位の相互認定に関する協定書

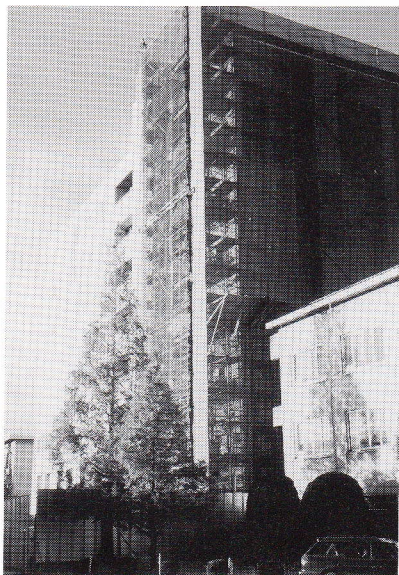
名古屋大学大学院国際開発研究科と神戸大学大学院国際協力研究科との間において、両研究科の学生が相手大学大学院前期課程開講の授業科目を聴講し、単位を取得することを相互に認めることに合意したので、ここに協定書を取り交わす。

1. 履修できる授業科目及び単位数は、博士前期課程開講の科目とし、10単位以内とする。
2. 履修できる授業科目は、原則として講義によって行う科目のみとし、演習、研究指導等は含まない。
3. 学生の身分は特別聴講学生とする。
4. この協定に関する事務取扱要領については、別に定める。
5. この協定の改廃については、その都度協議する。
6. この協定は、平成9年10月1日から実施する。

名古屋大学大学院国際開発研究科と
広島大学大学院国際協力研究科
との間における単位の相互認定に関する協定書

名古屋大学大学院国際開発研究科と広島大学大学院国際協力研究科との間において、両研究科の学生が相手大学大学院前期課程開講の授業科目を聴講し、単位を取得することを相互に認めることに合意したので、ここに協定書を取り交わす。

1. 履修できる授業科目及び単位数は、博士前期課程開講の科目とし、10単位以内とする。
2. 履修できる授業科目は、原則として講義によって行う科目のみとし、演習、研究指導等は含まない。
3. 学生の身分は特別聴講学生とする。
4. この協定に関する事務取扱要領については、別に定める。
5. この協定の改廃については、その都度協議する。
6. この協定は、平成9年10月1日から実施する。



増築工事中の研究科棟

スタッフの人事異動

[教 官]

H 9. 3.31

辞 職

佐々木由香 助 手 (三重県立看護大学講師へ)

H 9. 4. 1

昇 任

佐藤 幸男 教 授 (富山大学教育学部へ)

東村 岳史 講 師 (助手から)

採 用

酒井 智宏 助 手

協力教官の変更

貝瀬 幸雄 教 授から 小畑 郁 助教授へ

渡邊 誠 教 授から 和田 壽弘 助教授へ

海津 正倫 教 授から 松本 康 助教授へ

滝澤 隆幸 教 授から 杉浦 正利 助教授へ

H 9. 4.16

採 用

梅村 哲夫 助 手

H 9. 5.16

昇 任

澤田 眞治 助教授 (岐阜大学教育学部へ)

H 9. 6. 4

辞 職

嘉数 啓 教 授 (沖縄振興開発金融公庫
副理事長へ)

H 9. 6.30

辞 職

ポリコ ンブリ 助 手 (国連食糧農業機関へ)

H 9. 7.16

採 用

ウィン チョー サン 助 手

H 9. 8.16

採 用

荒木千夏江 助 手

H 9. 9.30

辞 職

倉沢(猪俣)愛子 教 授

(慶應義塾大学経済学部教授へ)

H 9.10. 1

採 用

西村 美彦 教 授 (国際協力事業団から)

[事務官]

H 9. 4. 1

昇 任 山岸 裕孝 (豊橋技術科学大学へ)

配置換 神戸 幸夫 (文学部へ)

倉橋 克夫 (情報文化学部から)

羽毛田正人 (工学部から)

国際開発関係大学院研究科長会議

第5回「国際開発関係大学院研究科長会議」を10月31日に名古屋大学グリーンサロン東山のミーティングルームで開催しました。

この会議は、平成3年度に創設された名古屋大学をはじめ、埼玉大学、東京大学、横浜国立大学、神戸大学、広島大学の6大学7研究科の国際開発関係大学院の研究科長が、論文博士の審査基準、卒業生の進路、インターン制度等について討論をしました。特に、厳しい状況となっている卒業生の進路については、国際開発高等教育機構の今西専務理事、国際協力事業団の湊人事課長、国際連合地域開発センターの大矢主任研究員を招き熱心な討論が行われました。

また、この会議には、文部省から吉尾教育文化交流室長、手島大学院係長にも出席願ひ、討論の中で貴重な助言等を得ました。

会議終了後、同会場で引き続き懇親会を開き、森法學部長、奥野経済學部長、平井言語文化部長も参加されました。

なお、今回は広島大学で開催されます。

